

Newsletter

December 2012

<http://www.aack.or.jp>

目次

ザンスカルとラダークの呼称問題

月原敏博……………1

西北研究所と

「冬のモンゴル」を巡って

斎藤清明……………5

元雲南省体育局の張俊さんと会って

田中 貴……………10

私の京大山岳部

一九六〇年代を中心に

(連載・第四回)

吉野熙道……………11

図書紹介

「梅棹忠夫」―「知の探検家」の思想と生涯」

山本紀夫著

前田 司……………24

ザンスカルとラダークの呼称問題

月原敏博

近年、AACK・KUAC関係者によるインド最北部のトランスヒマラヤ地域での活動が盛んで喜ばしいことです。とくに、今年夏の山岳部隊による未踏峰登頂は嬉しいニュースでした。

地球研「高所プロ」(代表者・奥宮清人氏)の活動の一環でここ五年ほどラダークで調査をしています。が、表題の呼称は気になっていたことです。日本の登山界や旅行書ではザンスカル、およびラダックと記されることが現在は一般的ですが、それぞれザンスカル、ラダークとする方がよいのではないかと考えるのです。山岳部副部長の竹田晋也氏からはこの種の情報は関係者には伝えるべきと提言されてもいたので、ザンスカルについては九月二六日、二七日に笹ヶ峰会MLに投稿しましたが、今回ここにラダークも加えて書かせていただきます。投稿内容に興味をもたれて寄稿を勧めて下さった前田編集長に、まずはお礼を申し上げます。

最初にザンスカルですが、後半部

をカールと引き延ばすべき確かな理由が見つかりません。今年九月に竹田氏らとともにザンスカルを訪問した際にも現地人に確かめました。が、予想どおり後ろの部分の発音はカールではなくカルであるとのことでした(竹田・月原とも「高所プロ」による現地訪問であり、山岳部隊とは全く別の学術調査ながら、山岳部隊が手配を頼んだ業者Hidden Himalayaとも念のため情報を交換しつつ、連絡を受けた時には動けるよう心構えだけはしての現地行動でした)。

チベット語圏の現地語、すなわちチベット文字で綴られる原語を西洋式のアルファベットの綴りに変換する方法には何種類ものやり方がありますが、いまおおよそ国際的な標準になっているのはワイリー(Wylie)方式かそれを基礎に微調整をしたものです。

ザンスカルは、ワイリー方式など一般的な変換方法で転写すると *zangs dkar* や、前半の *zangs* は「銅」、後半の *dkar* は「白」の意味です。からザンスカルは「白銅」の意味になります。これがザンスカルの言葉の綴りと意味についてもっとも普通になされている説明であり、今回現地で聞いた説明もそのとおりでした。

発音は、前半の *zangs* はラダーク

やザンスカルでは綴りに近いザン（ス）のようですが、ラサ方言やンガリ方言などチベット語一般ではサンと発音されます。ですからチベット人の呼び方ではザンスカルはサンカルです（チベット語だと、ཅུང་ལྷོ་མོ་ *zangs* の最初の *z* が英語の *s* のように発音されるとともに、最後の *s* は発音されないわけです）。

後半の *dkar* カルは、「白い」を意味する *dkar po* からきています。チベット語圏では *dkar po* はカルポ、カーポ、カルブなどと発音される語です。ここでまず重要なのは綴りの最初の *z* はラダークやザンスカルにおいても発音されないことです。また、*po* についてはチベット語圏では *p* と *ɸ* が音としては連続的で、綴りの *ɸ* が事実上 *p* のように発音されることもあることや、最後の母音 *o* も *oo*（ウー）のような発音になることと方言的・口語的に平気でありうることです。山名で言えば、ビルマのカカルポラジのカルポ、雲南の梅里雪山のカワカブ「カワカポ」のカブ「カポ」、*ཧམ་མམ་པོ་* の *dkar po* です。カル *dkar* の部分だけを含む山名としては、ブータンのガンカープンスム「ガンカルプンスム」のカー「カル」などをあげることができます。ザンスカルの場合、*dkar po* の *po* は付いてなく *dkar* の部分だけが使われた合成語で、チベット語圏の発音の一般的常識に照らしても、後半部はカル、すなわちザンスカルとするのが最も適当となります（何としても長音で表すとしても、その場合はザンスカーまでで最後の *ル* はまず付けられない）。

なお、アクセントは前のザンスの *z* 上で

はなく後ろのカルのカ *ka* にあり、音の高さも、この二つの *z* 音のうち後ろの *z* の方が高い音になります（チベット人がいうサンカルの場合も同様）。

以上のように、現地音に従うとザンスカルではなくザンスカルの表現の方が適切と思われる、したがって、例えば日本語版ウィキペディアの「ザンスカール」のページにある「ラダック語ではザンスカール（中略）と読む。」という記述は事実確認ができず、誤りだと考えています。

次に、ローマ字による英語式表記については、最も一般的な綴りには *Zanskar* と *Zangskar* の二つがあります。これらについてはウィキペディアの「*Zanskar*」英語ページ <http://en.wikipedia.org/wiki/Zanskar> の *Eymology*（語源学）のところに、地名の由来の異なる解釈も含めて関連情報が書かれています。その説明の最後に「Thus, even if etymologically it would be more correct to use “Zangskar”, the most frequently found spelling for this region is undoubtedly “Zanskar”、とあるように、語源的には *Zangskar* の方が正しくても一般には *Zanskar* の方が多く使われているのが現状です。現地へ赴いて地名を英語式に綴って紀行文等を書いた英国人などについても両方があります。が、*Zanskar* の方が多数派です。ただしラダーク王統記を翻訳した学者フランケなどは、*z* を入れて *Zangskar* と書いています。原綴りを推測する上では *z* がある方がわかりやすく、そのため *z* 入りの方を個人的

には好みますが、どちらがよいかは人によって意見が分かれるだろうと思います。

インドの行政や公的記録で使われている英語式表現を確かめると、そこでも昔から *Zanskar* の方が多かったようです。例えばカニンガムの著書『*Ladak*』（一八五三年）は *Zanskar* と記す古い例ですし、ザンスカルを含むカルギル県の現在の公式英語 <http://kargil.gov.in/> でも、ザンスカルを *Zanskar* として *z* は入っていません。

行政を考えるとヒンディー語やウルドゥー語（J&K州公用語）での表現も気になりますが、ウィキペディアの「ザンスカル」のヒンディー語ページにあるデワナガリ文字の綴りをアルファベットに直すと、これは最初の *z* の *a* の方のみ長音記号がついていて *z* はないので *Zanskar* ザンスカルになります。ウィキペディアの「カルギル」のウルドゥー語ページにある綴りは、同じく変換すると *Zanskar* ザンスカールになる、と思えます。したがって、一般の英語式表現では長母音は明示しなくてよいとすれば、インドの行政等では英語だけでなくヒンドゥーやウルドゥーを考慮しても *Zanskar* で OK だということになるでしょう（ウィキペディアのヒンディー、ウルドゥーの綴りをどれだけ信頼できるかはわかりませんが）。

なお、注意しておきたいことは、*Zanskar* でも *Zangskar* でもない、*Zaskar* のような綴りも一部では公式に使われ続けてきたことです。例えば、インド測量局の作る英語版地図では長母音を明示しますが、*Zaskar* ザース

カールの表記が少なくとも従来は支配的で、パキスタン測量局の地図では Zaskar ザスカールも見えました。それから、インド政府が作る地名辞典 (Gazetteer) には英領期のもも独立後のものもありますが、いくつか見ると、測量局の地図と同じ Zaskar ザースカールなる表現が多く採られています。しかし、なかには Zaskar ザスカールと Zanskar ザンスカールの例もあることを見出しました (Gazetteer of Kashmir and Ladak¹)。一八九〇年。この a は長音の a と同じ意味で使われています)。

このように、主な英語式表現としては Zanskar (一般に一番多い。いまのインド行政でも使う) と Zangskar (フランケなどの学者に見られる傾向あり) の二つがあり、行政を含めても前者が一般的ですが、ヒンディーとウルドゥーでの表現や官制地図・地名辞典などに現れる例を長母音まで含めて再度列挙してみると、Zanskar ザーンスカル (ヒンディー語綴り、ウイキペディア)、Zanskar ザーンスカル (ウルドゥー語綴り、ウイキペディア)、Zaskar ザースカール (インド測量局地図、Gazetteer の独立前・独立後のもの)、Zaskar ザスカール (パキスタン測量局地図)、Zaskar ザスカール (“Gazetteer of Kashmir and Ladak²” 一八九〇年)、Zanskar ザンスカール (同上) といろいろ収集できる結果となります (笑)。

長音のことも含めて並べてみれば公的な使用例でもこれだけ多様だと驚きますが、なぜこれほどの多様性が生まれたのかを考える

と、ラダーク・ザンスカルに隣接しているいろなインド系の住民・言語があり、地域によって微妙に異なるそれぞれの呼び方で「インド人たち」がザンスカルのことを呼んできたに違いないことに思い至らざるを得ません。例えば、後半部をカールと伸ばす呼び方は、カシユミールかどこからの呼び方から来ているのではないか、というようなことが予想されるのです。ただし、上に見た例だけでもわかることは、官制地図や地名辞典では、現地人による現地語での発音が常に採用されるのではとうていなさそうであることです。ザンスカルを含むラダーク地域は、現在ではジャンムー・カシユミール州に属しますが、中心城市のジャンムーもシュリーナガルも非チベット語圏で民族も宗教も異なります。例えばそれらの州都での発音が採用されれば、現地の発音と異なっても不思議ではありません。Zanskar か Zangskar かの話しに立ち戻つていえば、本当はザンスカル人自身に a を入れるべきかどうか判断してもらうのがいちばん良いように思います。

続いて、ラダークについても述べておきます。ラダークの場合は、七〇年代半ばから観光や登山での入域が可能になって以降、ラダックというカナ表現が徐々に支配的となりましたが、それ以前はラダークやラダックという表現のほうがちろ優勢であったかと思われまます。ラダークを採った例には古くは河口慧海師や大谷探検隊 (柱本瑞俊氏) などがあり、ケニス・メイソンの『ヒマラヤ』白水社 (田辺・望月訳、邦訳初版一九五七年、第二

版一九七五年) など少なからぬ山岳書でもラダークを当てていました。薬師義美氏も複数の著書でこれを用いています。ラダックを採った例には日野強、佐藤長、鹿野勝彦などの諸氏があり、高等学校の地理の地図帳では現在でもラダックが使われています。一方、ラダックの例は、入域が可能になってのち、とくに八〇年代以降の登山・トレッキング書や観光書のほか NHK の「シルクロード」などのテレビ番組でも多く採用されてかなり一般的に使われるようになりました。これには研究者によるその使用、例えば山口瑞鳳氏や、仏教系のいくつもの大学が派遣した調査団の学術報告書等での使用も関係したかと思われまます。

ラダックとする場合の問題点は、ダの後ろに撥音のツを入れるべき理由がみあたらないことです。またそれを採用した場合はラダーク人を指すラダーキーというインド系言語による呼称に対し、ラダッキという、こちらは現実の音からはいっそう乖離した少々異様なカナ表現を生んでしまうこともあります。

ラダークは、現地のラダーキー (ラダーク人) たちの発音ではラダー「ラタア」ないしはラダー「ラダア」です。同じチベット語圏内でも発音に大きな違いがみられるのですが、ただしアクセントはいずれの場合もダ「タ」の部分が高音で、そこにアクセントと高音があります。

ラダークの前綴りは、ローマナイズすると *La Dangs* ですから、この場合は後半部の

lugs)の部分の発音が方言的にかなり違っているのです。英語風に言うと、ラダーキーはこの部分を *da* と原綴りに近い形で発音するの、チベット人は *da* ないしは *da* のように原綴りからいっそう乖離した発音をしているのです(綴りの *ss* は、ラダークにおいても発音に影響しない)。チベット語圏内でも発音に開きが大きいので、カナで表記するのにどうすればよいか悩んでしまいますが、参考にするべきはインドで広く使われてきた Ladakh ラダークという呼称です。また、このことこそ、日本でも以前はラダックとせずにラダークやラダクとする例が少なかつたことと関わっていると考えられます。

長くなるので細かな記述は省略しますが、ザンスカルについて行なったのと同じように、ラダークについてインド測量局の英語版地図、インド政府が作った地名辞典、インド行政で使われる地名表現(ヒンディー、ウルドゥー含む)を確かめてみると、そこにはザンスカルにあつたような多種多様な表現のブレはありません。つまり、長音も明示する形でいえば Ladakh、でなくとも Ladak という表現がインド一般では古くからまったく支配的であり続けているのです。ですから英語式綴りも Ladakh と Ladak が古くからあり、ムーアクロフトの記録(一九世紀前半)は Ladakh、ドリユー(F. Drew)の記録(一九世紀後半)は Ladakh と記しています(ムーアクロフトの記録はその書の全体において長母音の字は使っていない。ドリユーの記録は長母音の字を使用し、この *ss* は長音の *ss*

なので *ss* に同じ)。Ladak の例には先に挙げたカニンガムの “Ladak” (一八五三年) や “Gazetteer of Kashmir and Ladak” (一八九〇年) で見られます。つまり、英領インドから連綿と続くインドの公的表現は、カナにするならみなラダークになっているといつてよいのです。

このように確認してみれば、日本でかつてラダックが主流ではなくてラダークがしばしば採られていたことは、インドおよび英語記録での一般的表現にまったく素直に従つたのであり、またラダクとした例は、*ss* の *ss* が長母音であることを特に意識しなかつた(あるいは現地ラダーク語では少なくとも *ss* の *ss* は長母音ではない) ために、そう表現したものと考えられます。ラダーク現地でラダーク人がいうラダクスも決してラダックスではないので、撥音の *ss* を入れる理由は、私が調べる限りでは現地語からもインド等での用例からも見出せないのです。撥音の *ss* をなんとか入れることを考えたとしても、ヒンディー語で書かれたラダークの綴りをカナに変換する場合に、ラダークでなくてラッダークとすることにもいくらか妥当性がある程度に過ぎません。したがつても *ss* を入れるのならダの後ろでなく前に入れるほうがまだしも適切と考えます。

ラダークという表記は、ラダーク語やチベット語という現地語での発音には即してはいません。この点は気にはなりますが、ラダークは両者の音の中間的なものであること、そしてインド人一般がブレることなくラダーク

を呼ぶときの発音には即したものであることから、現状ではこれを採用するのがいちばんベターではないかと考えます。また、こうしてカナでの長母音を明示することで、アクセントについては日本語として普通に読んでもダのところは自然とアクセントがつくようにも思うので、それは一つの利点ではないかと考えます。とにかく、ラダックといふときの *ss* を入れるにふさわしい理由は見いだせない、それはまず外した方がよいというのが私の意見です。

以上、ザンスカルとラダークの呼称問題について述べさせていただきました。この種のことはいだすときりがないところがあるし、私もそれを好むわけではありません。つまり、私も問題ともいえないのですが、現実には乖離した過ちが定着すると、やはり問題だとも思います。できることなら現地人による表現をできるだけ忠実にカナにするのがよいと思つてはいますが、すでに一定程度定着している表現がある場合、急に変更しても混乱が生じかねませんから、判断が難しいところです。ブータン(現実にはブータン)やチベットについても、同じようなことが言えます。

地名のカナ表記の問題は、外国地域を語る際にはいちばん基礎的なことですが、たいへん意外なことに、現地語に深く配慮した優れた研究書や旅行ガイドブックであっても、重要な地名については触れてないことがほとんどです。今回の調べでは、日本国内における二つの地名のカナ表現例を細かく歴史的に調べることはしていませんが、もしそこ

までしつこく調べれば、こうしたカナ語の発生や変遷自体が、一種の文化研究のテーマになりうると思像されるほど、ある意味面白い現象であると感じます。登山家たちも、現実にはその歴史のプレーヤーの一人となつてしまっていることは頭のどこかにいれてお

西北研究所と

「冬のモンゴル」を巡って

斎藤清明

昨夏の大興安嶺行（『AACK Newsletter』五八号「大興安嶺探検のマル秘」報告書」と再訪の旅）に続いて、今夏（二〇一二年）は中国の張家口から内モンゴルをまわつた。今西錦司（一九〇二〜九二）、梅棹忠夫（一九二〇〜二〇一〇）さんたちの探検・フィールド調査を追跡したのだが、太平洋戦争末期に張家口にあった西北研究所（今西錦司所長）こそ、戦後の京大のフィールド科学の展開やAACKの活動のもとになっていると、あらためておもつた。

幻の研究所

今西さんが所長をつとめ、加藤泰安、中尾佐助、梅棹さんという、AACKメンバーが所属した西北研究所は、一九四四年四月に当時の蒙古聯合自治政府の首都、張家口に設けられた。日本の敗戦まで、わずか一年半弱しか存在しなかったが、その間の冬のモンゴ

てよいことかと思えます。

なお、最後に付言しておけば、「高所プロ」の報告書等ではなるべくラダックではなくラダークを使っていたと思いますが、その理由は上の私の意見を容れていただいたことによっています。

ル調査などの成果は、戦後に大陸から帰国後、今西『遊牧論そのほか』（一九四九）、梅棹「乳をめぐるモンゴルの生態」の一連の論文（梅棹忠夫著作集第二巻『モンゴル研究』一九九〇に収録）などとして世に出ている。

しかし、短命に終わった研究所については、戦後しばらくはほとんど記されることはなかった。そのために、どのような研究所だったのか、さまざまな憶測を呼んだようだ。「あの時代に、あんなところに奇妙な研究集団があったということは、多少、伝説化してかたまりつがれているようである」と、梅棹さんは一九九〇年になって振り返っている（梅棹『回想のモンゴル』）。

幻の研究所などとうわさされていたのだが、当事者をはじめ具体的に研究所について明らかにしたのは、藤枝晃・京大名誉教授の談話記録「西北研究所の思い出」（一九八六『奈良史学』第四号）だった。

西北研究所の主任だった藤枝さんに、原山煌（桃山学院大）と森田憲司（奈良大）さんがインタビュールしたもので、私も同席させてもらった。引き続き、原山さんと一緒に所員の磯野誠一・富士子夫妻、中尾、梅棹さ

んにも話をうかがった。さらに、森下正明さんには私が単独でうかがった。

梅棹さんは眼を患われて入院中であつたが、よく思い出されて語られた。その録音テープなどをもとに、梅棹さんは「回想のモンゴル」を書き下ろされ、梅棹忠夫著作集第二巻『モンゴル研究』一九九〇に収録された。

こうして、西北研究所について当時のメンバーから聞き書きが得られたので、私も『今西錦司―自然を求めて―』（松籟社一九八九）では、今西さんの西北研究所時代を第一章にして執筆することができた。

辺境の研究集団

西北とは、西北中国を意味しているというまでもない。その研究所は、日本の傀儡政権である蒙古聯合自治政府の財団法人蒙古善隣協会に所属していた。そして、同協会そのものが、日本政府の大東亜省の全額助成団体だった。西北研究所は「帝国日本」の学術機関ということになる。

スタッフは、今西所長に、次長は石田英一郎（民族学）さん、戦後に東大教授となる。主任は第一課（理系）と第二課（文系）にそれぞれ、森下正明（昆虫学）と同じく京大教授と、藤枝晃（東洋史）さん、所員や嘱託として理系には中尾、梅棹さんが、文系には磯野誠一（法社会学）さん、同じく東京教育大教授と富士子夫妻、酒井行雄（心理学）と同じく広島大教授、甲田和衛（社会学）さん、同じく大阪大教授らがあつた。それぞれ戦後に研究者として名を成した顔ぶれであ

る。新婚の梅棹夫人は図書係だった。

加藤泰安さんは、研究所からのエクスペディションのマネージャー役として今西所長に招かれた。学習院（高校）時代から登山で鳴らし、京都帝大旅行部では、白頭山エクスペディションに参加し、また、旅行部隊リーダーとして大興安嶺最高峰に初登頂するなど活躍してきた。A A C KのK2登山計画の交渉にインドへ行くつもりだったのに果たせず、モンゴルを放浪した経験もある。憧れていた中央アジアの一角に立ったとき、涙がとめどもなく流れたという。卒業後、満州航空に入社。木原均隊長のA A C K内蒙古学術調査隊（一九二八年）に加わったり、一九四〇年に予定された東京オリンピックの聖火の中央アジア経由計画に取り組んだりもした。陸軍中野学校をへて、中国の地方軍閥との交渉にも当たった。当時、今西さんの叔父（当時、朝鮮銀行の北京支店長）の娘と結婚したばかり。

このほか、梅棹さんたちの仲間の大学院生、和崎洋一さんも呼ばれて奥地旅行に参加する。また、吉良龍夫さんも声をかけられたが、病身だったため京都で留守本部の役目をつとめる。今西所長は、ほかにも京都から学生たちを囑託のかたちで呼ぼうとした。

このように西北研究所には理系と文系の少壮、若手の研究者がつどっていた。戦争のさなか、日本内地からみれば辺境といえる蒙疆の地にできた、まだ海のものとも山のものともわからない研究所は、いわば文理融合の研究者集団であり、フィールドワークの拠点となった。

張家口は古来からモンゴルと中国との貿易の関門である。万里の長城が両側の山から迫ってくる城門（大境門）のすぐ外側に宿舎が、城内に研究所があった。今西さんは、ここを拠点に学術探検を繰り返るつもりだった。そして、まず冬季のモンゴル草原へ奥地旅行を敢行する。

冬のモンゴル

今西さんにとつて、モンゴルは三度目だった。最初は一九三八年の自動車旅行。駐蒙軍の調査に、A A C Kを中心とする京都帝国大学の学術調査隊（木原均隊長）が便乗して、内モンゴルを広く廻った。今西さんは草地でクオドラード（方形）の枠を広げて草の種類や数を調べた。木原均編『内蒙古の生物学的調査』（養賢堂、一九四〇）となる。

二回目は、翌一九三九年。森下さんと二人で、京大にできた興亜民族生活研究所から派遣された。張家口から馬車で北方に向かったが、目的としたグンシャンダーク砂丘を越えることはできなかった。それでも、『草原行』と題して執筆し、五年後の第三回目の調査に出かける直前に、張家口で脱稿した（出版は、戦後の一九四七年）。

こうして、一九四四年九月六日、張家口を発ったメンバーは、今西、加藤、中尾、酒井、和崎、梅棹の六人と通訳のモンゴル人の青年二人とコック。トラックで張北まで行って、あとは借用した牛車に荷物の積み、隊員は馬に乗った。馬がラクダにかわることもあったが、いずれも途中の部落で借りて駅伝式にす

すんだ。

一行はまず、親日家でしられる満州族の名門、肅親王家の牧場へ。梅棹さんが乗馬とモンゴル語の習得のために住み込んでいたところだ。ついで、グンシャンダークの砂丘越えにかかった。ここはゴビ砂漠とか東ゴビとも呼ばれるが、砂漠のいわゆる荒涼さはなく、ステッペと呼ばれる草原地帯のなかにある。

この砂丘地帯は、馬を飛ばせば四日間ほどの距離だが、肅親王牧場から一六日間かけて、ゆっくりと横断した。草原が砂丘によって切れ切れになっていて、馬群の放牧などには適さないが、人が住み、牧野もあった。立派なラマ廟もいくつか建っていた。

砂丘地帯を越えると、タルチン・タラと現地で呼ばれている大平野があらわれた。まるで海のような広がり、水がないために無人地帯になっていた。そこを、十分に準備をととのえたうえで、月明りを利用し、まる一日分の水と燃料で、計画どおりに二日間で突破した。

そこは、野生の世界だった。日が落ちるとともに、オオカミの鳴き声が聞こえてきた。大型の野生獣である黄羊の大群にも出会った。そして、人間の手がくわわっていない原野で、珍しい植物に出会った。ハネガヤよりも背の低い種類の草で、仮に「ヒメハネガヤ」と名付けた。これまで見慣れてきた草原とは、まったく型を異にする草原だった。

タルチン・タラを越えるあたりで出発以来すでに二カ月も経過し、加藤、酒井、和崎さんが先に引き返していった。きびしい寒さの

なか、今西、中尾、梅棹さんらはさらに長駆して、外モンゴルとの国境にまで至る。

帰路は、やや西よりにとつて、再びタルチン・タラを渡った。雪におおわれ、さながら凍れる海のようなだった。こんどはラクダを一九頭そろえ、有明の月のなかを早出して南へ縦断し、夜がくるころに「対岸」のザレンスムに着いた。

ここで二週間ほど滞在し、記録類の整理をしたのち西スニトまで南下、それから東にコースをとつてチャハル盟に入り、肅親王牧場をへて張家口に帰つたのは翌一九四五年二月二六日のことだった。

寒風ふきすぎぶ冬のモンゴルの調査は、それまでは夏にトラックで行うという常識を破る、画期的なものだった。梅棹さんのちに、今西さんを追悼する文中で記している。「その結果は大成功であった。いままで冬のモンゴルをみた日本人はだれもいないのだ。まさに前人未到のくわだてだった。そのおかげで、いままでいられていない事実がおびただしくわかった。常識に反しての意表をつく発想がこの成功をもたらししたのである」

張家口を訪ねて

二〇一二年夏はちようど、今西さんの没後二〇年、梅棹さんの三回忌にあたる。その面影があざやかなうちに、足跡をたどつておきたかった。今西さんの海外での足跡のうち、すでに樺太、ポナペ島、ヒマラヤ、アフリカは、たどつてきた。二〇一一年夏には大興安嶺を巡つたので、残るは張家口と内モンゴル

ということになった。

じつは、西北研究所について藤枝さんたちに聞き書きをしたころ、張家口に行きたかつたのだが、当時は外国人の立ち入りが禁じられていた。軍事的な理由によるものらしい。一九八一年に梅棹夫妻が内モンゴルを訪れた際にも、張家口には入れず、郊外の張家口南駅のプラットホームに立つて往時をしのんでいる。

もちろん、今日ではその立ち入り制限はなくなっている。じつさいその後、西北研究所に関心をもつ中生勝美（和光大）さんは、一九九五年に張家口を訪れ、藤枝さんらの回想録を手記の跡など関係施設を現地調査した。そして、「内陸アジア研究と京都学派—西北研究所の組織と活動」（中生編『植民地人類学の展望』二〇〇〇 風響社）を著した。

さて、今回の張家口・内モンゴル行。まず、北京から張家口に、バスで向かった。六月二四日、関西空港から北京首都国際空港に着き、地下鉄の空港線と二号线を乗り継いで長椿駅で下車。路線バスで六里橋長距離バスターミナルへ。張家口行きバスは、ほぼ三分ごとに出ていた。料金は六七元（約九〇〇円）と安い。

バスは北京市内でゆっくり客をひろつたのち、八達嶺高速道路に入つてからはぶつ飛ばした。岩山が迫る「万里の長城」辺りを抜けると平地になり、やがて高速道路から下りて張家口市に入った。現在の同市は南側に新市街が広がっている。さらに北上し、旧市街地

にあるバスターミナルまでは六里橋から三時間半かかった。

バスターミナル近くのホテルにチェックインし、部屋でシャワーを浴びてくつろいでいると、ドアがノックされた。フロントの女性と共にやってきた上司らしき女性が「外国人は泊めれない」という。国賓東昇大酒店に行つてくれと、紙に書いて示す。すでに午後八時過ぎだったが、タクシード移動する。なんと、張家口では最高級という四つ星ホテルだった。値も最初の宿の四倍余りするが、いたしかたない。

街の面影は消えて

翌日は終日、かつて西北研究所があつたころの街の面影を求めてまわつた。朝一番にまず、張家口駅。国賓東昇大酒店から一〇分ほど歩いたところ。四角い箱のような駅舎は新しい。五、六人が待合室にいるだけで、駅前も閑散としている。中国の多くの駅でみられる、あの雑踏ぶりがまったくない。現在では、街の南外れにある張家口南駅がメインなつてゐるだろう。無人のホームと線路を眺めながら、この張家口駅で繰り広げられた一九四五年八月二〇、二一日の在留邦人の総引き揚げのありさまをおもつた。

日本の降伏後のこと。ソ連・外モンゴル軍の侵攻を、張家口の北方二七_{km}にある丸一陣地で日本駐蒙軍が阻止している間に、四万人ともいわれた在留邦人が北京・天津方面へ、張家口駅から列車で脱出したのだった。梅棹さんは、最後から二本目の列車に乗つた。



大境門の周辺は整備中。かつての門外から撮す。

フィールド調査のたいせつな研究資料をかかえて、無蓋の貨車に。最後の一本は鉄道従業員用だったから、梅棹さんたちのは実質的に最終列車だった。

張家口駅を見た後、昨日到着した長距離バスターミナルまで路線バスで行って、周辺を歩いてみた。藤枝談話録にある当時の地図によると、西北研究所はその近くにあったはず。しかし、それらしき古い建物はみつからず、辺りはほとんど新しいアパート群になっていた。「隆昌港」という当時の地名もわからなかった。

さがす途中で、外貨が必要になって中国銀行のATMを利用したが、中生さんによると、この場所はかつての蒙疆銀行跡だという。そ

れも、高層ビルに変わっている。わたしもつとよく探索すべきなのだろうが、張家口の街じたいが戦後にすっかり変わってしまったことを知って、蒙古聯合自治政府の首都当時のことをしのぶのは、アナクロニズムのようにおもわれてきた。

あきらめて、張家口のシンボルの建造物である大境門に行ってみた。明の時代(一四八五年)に築かれたものだという。張家口は現在は河北省にあって、山西省と境界を接しているが、古くから周辺の遊牧民族に対する華北の防御拠点として重要なところ。市街地の北側を東西に延びる太平山に沿って築かれた長城が清水河と交差する位置に、関所として、大境門が設けられていた。それは、モンゴルと中国をむすぶ連絡口であり、ここまで北の草原からラクダのキャラバンがやって来て、また引き返して行くのだった。

西北研究所の宿舎は、大境門を出たところにあった。今西さんたちは、この門を通過して宿舎から研究所に一時間ほどかけて通勤していた。梅棹さんは、ラクダの列が鈴の音を響かせながら北の彼方へきえていくのを、宿舎の前のニレの木陰で見送った思い出を記している。

その宿舎をさがそうとしたが、大境門の外側にも新たな高層のアパートが立ち並んでいる。宿舎のあった辺りにも、住宅が広がっている。さがしに行ったところで、もう宿舎は残っていないだろうと、道端の木陰で休憩していたら、大境門小学校の下校時間とぶつかった。子供たちのにぎやかなありさまに、ラク

ダの隊列や今西さんらの通勤姿がダブつてくるおもいがした。道沿いには、すこし古いような民家が残っているが、昔のままなのだろうか。前にそびえる元宝山の山容は変わっていないのだろうか(宿舎のテラスで元宝山をながめながら飲んだ思い出を、今西さんは記している)。

大境門は、巨大な扁額「大好河山」を掲げた、昔の姿のまま健在だった。もつとも、観光開発に力を入れてるのだろう。門の南側には、昔の街並みの再現したという店舗街がほぼほきあがっていた。北側には広場と駐車場を整備中だった。広場には展示施設があり、往時の写真がたくさん掲示されていた。その中には、邦人が脱出した直後の八月二三日、張家口駅に展開する解放軍(八路军)を撮影したのもあった。張家口の歴史がよくわかる写真パネルになっていて、なかなか見応えがあった。入場券を求め、大境門の上へのぼった。きれいに修理されている。長城もそうだ。新しい石畳を上部へと登ってみた。対岸にも長城が連なっていて、はるかな往時がしのばれた。そうして、西北研究所の探索を終えることにした。

内モンゴル行

「冬のモンゴル」の足跡をたどりたいが、どうしようかと思案していたら、張家口から北にむかつてモンゴル国境のエレンホト(二連)まで、長距離バスが通っていることがわかった。一日一便、早朝に出て、半日かかりで到着するという。現在の中国ではバスの路

線が全土に網の目のようにあるそうだが、内モンゴルでも草原地帯に点在する町を結んでバスが通っている。

二六日午前五時にバスターミナルに行つたが、まだ開いていない。付近を歩きまわつて、また西北研究所のころをおもつたりした。やがて、モンゴル人の乗客もあらわれ、バスはほぼ満席になったが、前から二列目の席をとれた。六時過ぎに出発。郊外まで地道を行つてから、張北高速に乗つた。張北まで二七kmとの表示。やがて山地になって、野狐嶺との表示が現れた。荒涼として要衝の趣がある。戦時中、この辺りに丸一陣地があつて、駐蒙軍がソ連軍をくい止めたところなのだろう。

張北はかなり大きな町のように、バスターミナルは新しい市街地にあつた。ここから北西へ向かう。高速道路はいつの間にか終わった。それでも、いい道が延び、バスは時速八〇kmを越えて走る。化徳まで七五kmとの表示。もうすぐ内モンゴルに入る。霧もようのなか、しだいに耕作地が少なくなつて、高原風になつてきた。

八時すぎ、張北／康保界を越えた。畑が見えなくなり、植林も背丈の低いのを散見するだけ。草地在が広がってくる。バスのチェックポイントがあつて、線路をくぐつて、人工的な一角に着いたとおもうと、化徳の真新しいバスターミナル。乗客が入れ替わつた。

風力発電の風車が現れる。丘陵地にズラリと並んでいる。北のほうに遠く、低い山並みが見える。陰山山脈だろうか。道路は、真つ直ぐに延びている。一〇時前、黄旗で運転手

と助手が交代した。もう、ゲンシヤンダークの西端の砂丘越えにかかつているはず。広い範囲でいえば、いわゆるゴビ砂漠の一角になるのだろう。それほどきつい丘陵ではなさそう、バスはぶつ飛ばしていくが、今西隊の牛車ではノロノロとしか進めないなあ。

やがて、平原になつた。一時すぎ、広い道路に合流した。ウランチャップ（集寧）からエレンホトへ、ほぼ南北にまっすぐ、内モンゴルを縦断する街道だ。ポリスが乗り込んできたが、チラッと車内をながめただけ。トラックは荷物をチェックされている。ほどなく、スニト右旗に着いた。

地平線までまっ平らなところに、ポツンと開かれた街のようだ。新開地の端っこに立派なバスターミナル。発着を示す電光掲示板もある。運転手は食堂へ行つてしまい、三〇分ほどの昼食休憩となつた。今西隊のルート図と照合すると、隊が帰路にしばらく止まつた「西スニト」はもつと南になるようだ。ここはタルチンタラの大平原になる。

スニト右旗を出て間もなく、高速道路の出入り口。二連と集寧を結ぶ高速で、新しく、まだ一部しか使われていない。二車線、緑色のガードレールが鮮やか。二連まで一一九kmとの表示。その間に、料金所が二カ所にあつた。

草丈の低い草原。ただただ、広いだけ。ヒツジの群が、遠く、近くにポツン、ポツンと見える。ゲルは、ほんの少ししか見なかつた。それも、新しそつた。二連の手前二五kmにも料金所。羊を乗せたトラックが停まつて

いた。空港への標識もあつた。

もうそろそろエレンホトの市街が見えるだろうと待つていたら、道路の両側に、大きな恐竜が立つている。長い首を、道路の上をアーチ状におおつて。よく見ると、道路脇の草原にも、大小いろいろな恐竜の像が散在している。もちろん、張りぼての像だ。近年、モンゴルは恐竜の発掘地として知られるから、観光用にも売り出しているのだろう。恐竜の背後には、風力発電の風車が並んでいる。エレンホトの市街に入つて、午後一時半すぎにバスターミナル到着。張家口から七時間半かかつた。料金は一三〇元（約一八〇〇円）だつた。

門構えの壮大なターミナルで、内部は国際線と国内線に分かれ、国境越えのウランバートル行きを待つ欧米人の若者のすがたを見かけた。国内線は、北京、フフホト、大同、集寧行きなどがある。乗り場の案内板は、中国語、モンゴル語のほか、英語とロシア語で記されている。まわりの商店でもロシア語が目立つた。なお、町外れの駅からの列車は、フフホト行きが午前と午後一本ずつ、北京とウランバートル・モスクワを結ぶ国際列車も毎日一本あるようだ。

梅棹さんの「回想のモンゴル」によると、国境線ぞいにしばらく行進したという。町や集落らしい記載はなく、「外モンゴル側では点々と監視哨が立つている、ということであつた」という。当時の国境の緊張ぶりがつたわつてくる。内蒙古と外蒙古のモンゴル人どうしの行き来や交易などなかつたようだ。それが今日では、国境の交易地として、ビルやアパー

とも立ち並び、大きな町になっている。

ここまで来られた。ほんまに駆け足だった
が、今西隊「冬のモンゴル」ルートの片隅を
たどることができた。きれいな食堂を見つけ
て、ビール（それも、生ビールがあった）で
祝った。

元雲南省体育局的張俊さんと 会って

田中 貴

梅里雪山で大変お世話になった、かつて雲
南省体育局で勤務されていたらっしゃった張俊
さんに一〇月一日お会いする機会がありました。
私は今年の八月から、昆明理工大学生
命科学与技術院と京都大学大学院農学研究科
の間に結ばれている部局間交流協定を利用
し、農学研究科に席を残して一年間の留学を
スタートしました。研究自体は科研のプロ
ジェクトの一貫として滇池の湖畔にある湿地
の浄化機能について研究をしています。私
が今所属している生命科学与科学技术院に
も、AAC&Kとは関係の深い教員の方々が
いらっしやいます。私の理工大での指導教官で
あるイラビス先生は、京都府立大学の牛田一
成先生のもとで博士の学位を取得し、その後
も二〇〇八年まで府立大で勤務されていまし
た。また、同じ学院の魏先生も、AAC&K会
員の左右田健次先生の研究室出身で、氷河の
微生物を研究しており、梅里雪山の氷河には

帰路もバスで、スニト右旗から、朱日和、
集寧へと、線路と並行する街道をまっすぐに
南下。地平線まで広がる草原を、ずっとなが
めていた。草原といつても、草丈や種類がす
こしずつちがっていくので、今西さんの草原
の類型化を納得したのだった。

年に一度はサンプリングに行っており、今
回八月に私が明永に滞在している間にも偶然
ばったりと会いました。このAAC&Kと理工
大の間にある不思議な縁は、私が留学先の研
究室を選ぶ際に大きな決め手にもなりました。

留学開始前の今年の雲南懇話会に参加した
折に、AAC&K会員である左右田先生、中山
茂樹さんと、昆明に留学する話をしている
と、その際には是非、体育局的張俊さんに会
いに行ったらいいよということ、今でも密
に連絡を取り合っており、中川潔さん
から張俊さんをメールで紹介していただきま
した。本来であれば、中国に来てすぐにご挨拶
に伺うべきでしたが、八月は直接明永村に
行っており、お会いすることができませんで
した。

徳欽から帰って九月になり、学校の生活に
も慣れ、ちょうど張俊さんとお会いする約束
をしていた時でした。尖閣諸島の問題による
日中関係が悪化しました。昆明市内では大規
模なデモが行われ、学内でも反日運動をする
学生が少なからずおり、学院から日本人であ
る私は外出を禁止されました。研究もできな
い状態でひたすら寮と実験室に閉じこもる生

活をしていました。九月中、張俊さんは、昆
明市内の党校（共産党の幹部学校）におり、
市内に遠出できない私はお会いすることがで
きませんでした。

一〇月に入り、中国の長期連休である国慶
節が終わった後、以前のような戦争突入モー
ドの報道もなくなり、中国国内の雰囲気も幾
分安静になりました。私も多少自由に身動きがとれ
るようになりました。そして、やつとのこと
で張俊さんが現在勤務されている昆明医科大
学でお会いすることとなりました。初対面
でしたが、中国で販売されている京大梅里雪山
遭難のDVDに登場していたので、書記室の
席に座っていたのが、張俊さんだとすぐに分
かりました。私の顔を見ると、温かい笑顔で
迎え入れてくれました。

張俊さんは二年ほど前から、昆明医科大学
学務管理センターの紀委書記に転職されたそ
うで、現在は体育局とは関係のない仕事をし
ていらっしやいます。ここ最近では徳欽にも
行っていないとのことでした。ただ、体育局
時代に築いた日本との友好関係は、いまでも
大切にしており、昆明医科大学と日本の大学
医学部の間には、交流協定を結ぶために尽力さ
れているようです。現在は体育局ではないが、
もしAAC&Kが雲南省で登山をするのであれば、
できる限りのことはご協力しますとおっ
しゃってくださいました。AAC&Kの話にな
り、懐かしそうに、岩坪五郎先生、左右田先
生、松林公蔵先生、中山さん、小林尚礼さん
を始め多数のAAC&K会員の名前を上げて、
私の知らない当時の話、日本に行った時の

話をして下さいました。その際、人見五郎さんはどうしているのだろうという話になりました。昨年癌でお亡くなりなったことをお伝えすると、どうしてその時に私に誰も教えてくれなかったのか、私よりも若いのにと何度も繰り返しおっしゃって、ずっと死を悔やんでいらつしやいました。

最近義父が病気で寝たきりになってしまったそう、日に日に状態が悪化しており、家庭内で大変だと疲れた眼をして、おっしゃっていました。お子さんは、フランスに留学していましたが、まだフランスからは帰国していないようで、早く帰ってきてほしいのこともおっしゃっていました。

別れ際には、力になれることがあれば遠慮

私の京大山岳部

一九六〇年代を中心に

(連載・第四回)

吉野照道

ブータン 一九六九年〜一九七〇年¹⁹⁾ 会社勤め

私は一九六六年に卒業した。六年間山岳部にいたことになる。ついであるが、この頃山岳部内には「六年会」なるあやしげな集団があった、私はその第二代会長だった。要するに落第生が酒を飲む口実のために集まったのだ。決して排他的な派閥ではなく、ただし会長は六回生であること、会の目的は「飲

なく言つて下さいと何度もおっしゃつて下さいました。お話ししたのは三時間ほどでしたが、貴重な話を色々伺うことができました。その後も、最近中国の若者の間で流行っているSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）「微信」を通じて連絡を取り合っています。お酒は飲まない、タバコも吸わない、気さくな張俊さんは健康そのものでした。梅里雪山の遭難は私が一歳にも満たないときの出来事ですが、二〇年以上も前の交友関係が継続して、繋がっていくことは不思議なものです。末筆になりますが、このような人の縁を巡りあわせて下さったAACKの皆様

に厚く御礼申し上げます。

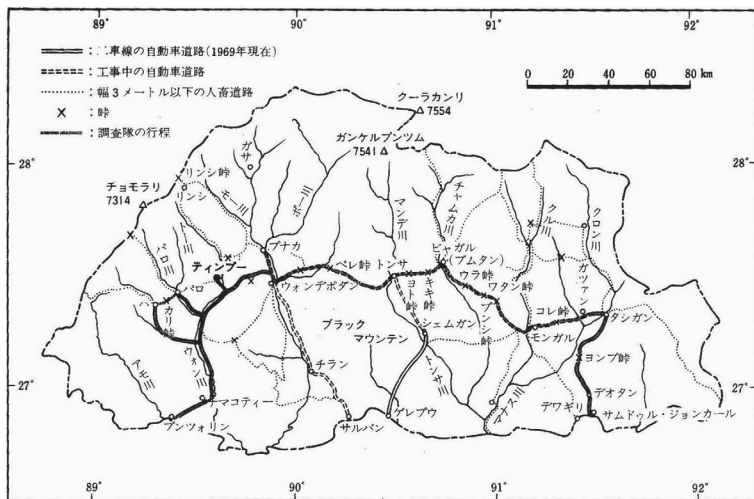
むときは浴びるほど飲む」とことと「将来このような会は消滅させるよう努力する」ということであつた。

私は勝手なことばかりして親に迷惑をかけたので、再び大学院に行くなどということとは考えられなかった。就職活動で会社めぐりをした。種苗会社に行きたいと思つたが、大手の会社でさえ「うちの中卒を教育するの十分です」などという雰囲気でありあつてくれなかった。植物遺伝学出身者などの就職口は少なかった。そもそも、卒業生はほとんどが大学院から研究者を目指す研究室なのだった。三〇数社目でやつとある大手製薬会社の入社試験を受けさせてもらえた。幸い合格した。所属は第一学部というもののし

い部署だった。卒業までに運転免許を取るように指示されて、なぜなのかよく理由がわからなかったが、要するに病院・医院を車で回つて薬の宣伝・販売をする、当時プロパーと呼ばれていた仕事なのだ。ただ薬の専門家としての立場から、他社よりずっと学術的な説明と手段によつて売るといったのだ。この業界は、大幅な値引きや一〇〇%以上は当たり前前の添付販売、リベートがまかり通つている世界なのだ。つきあいの賭けマージャンで勝ちを譲るなんてなまやさしい程度ではなかった。どんな業界でもある程度はそういうことはあるだろうと思つていたが、これは相当ひどいものだということがわかってきた。また医者の方もずいぶんひどいのがいた。「今度学会なんやけど、ちよつと小遣いがな、……」などとあからさまに金をせびる厚顔無恥な若い院生や医局員がいたのには恐れ入つた。

それに商売のことなど何も知らない不器用な関東人の身には、薬局や医師・看護婦の詰所に入つていく時、腰低く気軽に「毎度おおきにー」という言葉がスラツとは出てこなかった。まして軽口や冗談を連発しては雰囲気をごませる術はとても苦手であつたから、病院の方も（変なプロパーやな）と思つているのがあるありと見てとれた。

それでも何とか努力したおかげで、だんだん信用されるようになって売り上げも伸び、対人関係もスムーズにさばけるようになった。丸二年過ぎたころからは自分でも、そろそろ会社の方にも少しは利益をもたらせるよ



京大ブータン地図

うになつたかな、と感じられる程度になつた。私はだんだん落ち着いてきたと思つていたが、実はそうではなかった。逆に「こりやあ一生続ける価値のある仕事じゃないな」という気持ちが無知らず知らずのうちに、強くなつていったのだ。所詮医者に頭が上がりない立場であつた。先輩や同僚を見ても、ほとんど全員が薬剤師で、自分や嫁さんの実家が薬局だつたりするのがほとんどだつた。そのせいもあるのか、長く勤めあげる職場定着率は低かつた。真面目に勤め上げて部長の片腕にま

でなつた人が突然左遷された例などの話もたくさん聞かされた。

ブータンへの思い

私はヒマラヤのチベット系住民が住み、当時は鎖国状態だつたブータン王国に行くことを考へていた。ブータン・ヒマラヤは全くの未踏査地であり、登頂されたのは西ブータンの名峰チョモラリ(七二二四m)のみであつた。ガンケル・プンツム(七五五〇mとされていた)という最高峰周辺の地理はもとよりその高ささえはつきりしていなかつたから、そもそも我々も将来の登攀対象として可能な限り資料を集めていたのだつた。一九五七年に同国王妃ケサン・ワンチュック陛下が来日された。政府は特別な対応は取らなかつたが、桑原武夫先生たちAACR会員は陛下の一週間の京都滞在中、誠意をこめて接待申し上げた。桑原先生などは大の王妃陛下ファンになつてしまったそうだ。ごく内輪ながら「ブータン研究会」も立ち上げていた。

ブータンにはただ一人の日本人、西岡京治氏が国連コロンボ・プランの援助による農場を開いて、ブータンの若者に日本の野菜の栽培技術指導をしていたのだ。大阪府立大学の中尾佐助先生は日本人で初めて鎖国下のブータンに入国して「秘境ブータン」という名著を書いた。西岡氏はそのお弟子さんで、川喜田二郎先生が隊長であつた西北ネパール探検隊の隊員でもあつた。その間の事情を知るにつれ、私は氏のお手伝いをしながら、ブータンの子供たちに理科や算数も教えながら、少

しずつブータンの役に立てるようになっていよいよと夢想するようになっていた。

私より数年先輩のリーダーだつた土木工学の松尾稔さんが途上国の開発援助について、従来の道路や工場などの箱物インフラ整備中心の日本式援助に対して、批判的かつ革新的な考へ方を示していた。かつ遠征隊の行う學術調査についても、これからは現地の開発に直接参加・寄与できるものであるべきだと考へていたので。ちょうどその折、一九六九年二月、再び王妃陛下が来日され、この時に松尾は熱心にブータンの開発の在り方とマスター・プラン作成への協力可能性およびそれに必要な基礎的調査に関する考へをご説明した。陛下はそれに対して深い理解を示され、「私が招待しますからぜひいらしてください」とおっしゃつた。

我々は勇躍年内のブータン入国を目指して動き出した。隊員もすぐ決定できたし、国内的な準備については全然心配していなかつた。だが最大の問題はいかにして入国するかであつた。ブータンは尚武の気風に富んでいて、イギリスを含む外国に一度も負けたことのない独立国である。いくつもの土侯国同士で争いながら、しょつちゅうアッサムのテライ平野に攻め込んだのは、奴隷を確保して働かせていたとも言われる。しかし中国チベットとインドにはさまれた、微妙な位置にある内陸国である。二〇世紀初頭にやつとトンサを本拠とするワンチュック家による国内統一がなされたばかりで、社会組織も古く近代産業もない状態であつた。なお、王妃陛下はパロ

を本拠地とするドルジ家のご出身である。チベットを属国化した中共側にはつけないという事情と地政学上の問題から、ブータンはインドに軍事・外交交渉の多くの部分を依存し、資金援助を受けていた。お目付役と言ってよいインド政府の高等弁務官が首都ティンブーに常駐していた。このような事情から、中国と対立するインド政府は外国人がブータンに入国するのは最大限制限してきた。王室と特別な関係にあるスイスの地質学者ガンサー博士と西岡氏はほとんど唯一の例外であった。西岡氏はその人柄と献身的な活動によってインドもつかつに手を触れにくい存在にまでなっていたが、後に直接氏から聞いたところによると、それでも機会あるごとに追い出したいという圧力を感じるということだった。インドが用いる武器は「インナーライン・パーム」という、ブータン入国やアッサムの西北辺境地区 (NEFA) に行くためにインドを通過するための特別許可なのだ。しかし我々は王妃陛下招待のロイヤル・ゲストであるということ、この点は問題なしと楽観していた。

調査隊の構成は、総隊長の桑原先生、その秘書役の笹谷哲也 (ベベ)、松尾隊長、吉野副隊長兼 (偽医者)、院生の松田隆雄 (ランプ)、それぞれ理学部生の山本清司 (天外)、米本昌平 (ヨネ)、田中達吉 (タツキチ) となった。もっとも我々は「調査隊」という押しつけがましい名称をなるべく避けたいと思い、なるべく英語の Kyoto University Bhutan Mission という名称を用いていた。

結婚

私はブータンに永住する覚悟であったし、ひとたび日本に帰ったら再び入国できなくなる可能性が高いと思っていたので、当時付き合っていた女性を強引に説き伏せて結婚することに同意してもらった。妻であれば、呼び寄せることはできると賭けたのだ。無茶苦茶な話であるが、よくも承知してくれたものだと自分でさえ半ばあきれ、また心から彼女に感謝した。会社に退職願を出した時課長は、休職にしろと慰留してくれたが、それはもう無理だった。その直後の一九六九年五月二〇日、樋口さんご夫妻に媒酌をお願いした。急なことで式場や披露宴の会場など無い。神戸三宮センタービルのレストラン、スカイサントリーで山岳部仲間を前にしての人前結婚式を挙げた。妻は学生時代から神戸の女学生仲間プロはだしのハワイアン・バンドを組んでいたが、ここでよくアルバイトをしていた関係ですぐ安く借りることができたのだ。樋口夫人は今でもまだ、「あなたの奥さんは振袖着てお尻を振りながら、ウクレレ弾いて「ハワイアン・ウェディング・ソング」を歌ってたわね」と笑うのだ。またこの時母が父に「そういえば、私たちの結婚も今日だったわよ!」と言い出してびっくりした。もっとも父はすっかり忘れていたようだ。私は結婚が決まってから、時間を盗んで丹波の立杭焼の窯元に行き、一輪挿しを頼んだ。それを披露宴の引き出物にした。もっとも披露宴は会費制にして五〇〇円をもらったので、最低限の

付き合いマージャンの負けが相当多かったのがわかっていたので、退職金などただでさえわずかであることがわかっていたので、結婚指輪は小粒の八万円、結納金はたったの三万円しかなかった。お義母さんは受け取った後すぐ、苦笑しながら「新婚旅行中のお小遣いにしなさい」と妻に渡したことを後で聞いた。

二畳と四畳半だけの小さな借家に小さな箆筒と水屋だけ、二ヶ月間のままごとのような新婚生活が始まった。朝布団に入ったまま、蒸しタオルを顔に当ててもらい髭を剃ってもらうぜいたくにひたつた。

インナーライン・パーム取得の苦労

私は会社を退職して、八月早々に本隊に先駆けて単身ニューデリーに向かった。インナーライン・パームを実際に入手するまでどれくらいかかるかわからなかった。現地では日本大使館とインド外務省に日参した。外務省の担当課長は最初は愛想良く、すぐにも許可を出せるような口ぶりだったが、何日たつてもなんの進展もなかった。大使館からもいろいろ交渉してもらったし、日本からブータンにも連絡してもらったが、結局外務省は言を左右してなんの言質も与えてくれなかった。大使館に来られた西岡氏にも会えた。ブータンでの強力な側面援助を約束してくれた。

それでも進展は見られず、桑原先生と、笹谷がとりあえずニューデリーに来た。この頃日本大使館側は、我々を厄介な連中だ、と見

ている気配が感じられるようになった。インド外務省との関係悪化を避けたいと考えているかのようだった。桑原先生に対しての公使のやや横柄な態度などにそれを感じた。

ところでニューデリーは金曜日が禁酒日でこの日は酒を買えない。夜三人でチビチビやる分がなくなってしまう。私はずつと前から、タクシー運転手がたむろする茶店で彼らに交じって昼飯を食ったりビールを飲んだりしていたので、その一人にブランドデーかウイスキーを売ってくれと頼みに行った。比較的人の好きそうで、よく話していたシーク教徒の大男である。「OK、OK。家にあるから取りに行こう」というので、彼の車に乗って走り出したが、二〇分走っても停まらない。真つ暗な郊外になってしまった。これはやはりと青くなつた。ひよつとして、「邦人、行方不明となる」などという結果になるか？と思つた。三〇分で停まり、彼が酒瓶をぶら下げて家から出てきた時は本当にホツとため息が漏れた。それ以来事前に彼に頼んでおいては酒を調達した。

ブータンで

九月末にやつと桑原、笹谷のみが一週間の入国を許可された。王妃陛下が相当プッシュしてくださつて、西のインド国境の町プンツォリンからやつと本隊が入国できたのは一〇月二八日になつていた。王妃陛下の本拠地であるパロに滞在した。パーミットの有効期限はたったの一週間だけだったので、すぐに滞在日数を延長してもらふよう依頼した

が、インド側は二週間の延長しか認めなかつた。首都ティンプーの国王陛下や政府首脳への表敬訪問などを済ませて、西のハに短期旅行をしてチョモラリを見た。西岡氏ご夫妻にはすべての面ですつかりお世話になり、貴重な助言をいただいた。

我々は東の町タシガンへの横断旅行を計画していたが、それには一ヶ月はかかる。とりあえず出発してしまい、途中でなんとか延長許可をもらふという非常手段に訴えざるを得なかつた。首都以東の道中はジープ道路は無いので、歩かねばならない。

一月一四日やつと出発できた。それまでもずつと我々の世話をしてくれていた王妃付き武官のリンジ大尉が同行してくれて、二月五日にタシガンに着いた。

大尉はそれまで「東ブータンの女は美人が多く、織物が上手な働き者だ。おれはタシガンでいい女を見つけて結婚するのだ」と宣言していた。冗談だと思つていたが、着いた翌日、「式に来てくれ」と言われて仰天した。本当だったのだ！行つてお祝いの現金を渡して酒盛りをしたが、何かおかしい。二人の様子を見ると、大尉は一生懸命花嫁に話しかけるのだが、両者の間にはまったく会話が成立していないらしかつた。聞いてみると、東ブータンの言葉は西のパロやティンプーのものとはちがつていて、両者間ではほとんど通じ合わないのだそうだ。こんなので、よくも口説いたものだと感じた。しかし人のことは言えない。考えてみれば私だつて、卒業して就職後一年数ヶ月の女性を拝み倒して、ブータ

ン行を前提に嫁さんにしてしまい、結婚直後に別れてきたばかりなのだった。

七日にはサムドウル・ジョンカールからインドに抜け、ジープで西に突つ走つた。クツチ・ビハールの雑踏は目もくれずに走り抜けた。本当はこはゆつくり見たい所なのだが、ブータン人たちがつて我々日本人は、本来インドに密入国しているわけだからとうてい無理な話だ。八日夜にプンツォリンに再入国して、翌日パロに戻つた。

問題は本隊帰国後の吉野と山本の長期滞在許可であつた。吉野が西岡氏の手伝いをしつつ子供たちに英語や理科、数学、日本語などを教え、山本も数学を教えながら滞在する計画であつた。旅行出発時にはまだ正式許可はない状態だつた。元来遊牧民は夏冬で住む場所を替える。ブータン人も同様で、王室や政府中枢の人々は冬にはヨーロッパなどに避寒してしまふ。国王陛下はすでに出国されているので、二人の許可は出せないとの知らせがあり驚いたが、吉野・山本はとりあえず国王陛下の帰国を待つという名目で一ヶ月の滞在許可を二月一八日に申請した。本隊はその前日一七日パーミットの切れる直前、カルカッタに向かう王妃陛下と王女様たちの特別機に便乗して出国した。

不安定な状態ながら、二人はパロで待つ日を送つた。無聊な時にはスケッチをしては気を紛らせた。しかしとうとう、インド高等弁務官から、「二人を早く出国させる」との圧力が強まり、なすすべもなく一ヶ月後カルカッタに出て帰国した。

ブータン滞在中、特に旅行中に、私は各種の栽培植物の栽培状況について聞き取り調査を行なった。時期はすでに晩秋・初冬にかかっていた、イネやムギ類、トウモロコシ、ソバなどのほとんどの穀類やバレイシヨなどの芋類は収穫済みで、畑には菜類、カブラ、わずかなダツタンソバしか見られなかった。従って、倉庫や屋根裏の乾燥場兼保存場所から種子を少しずつ分けてもらった。これらにはほとんどの場合、雑草をも含む数種類の種子が混じっていて、帰国後にはそれらを細かく選別・分類することになったが、それはそれで大変興味深い作業となった。こういう作業はこの後何十年にもわたって、私のフィールド・



Ganker Puntsum 1969.11.29

ワークに伴う大事な仕事になったのだが、ブータンほど混じり物が多いところはなかった。

これらのうちもつとも重視したのはイネ・オオムギ・コムギ・ソバ・ダツタンソバ・シコクビエ・カブラであった。

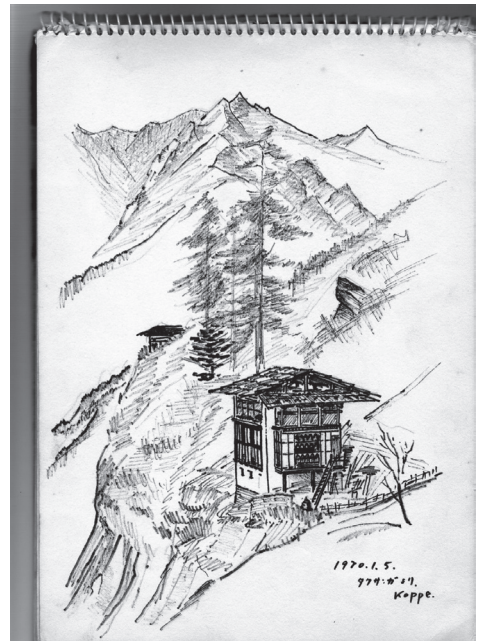
ダツタンソバは日本では栽培されないが、「苦いソバ」とも呼ばれ、「甘いソバ」と呼ばれる（普通種）ソバより収量は低い別種だが、低温に強くヒマラヤの高地では一般である。ともに粉に挽いてチャパティー状に焼かれる。ソバはまた酒にもなる。なお、酒と言え、その材料としてもつとも好まれるのはアフリカ原産のシコクビエであることはネパールと同様で、イネやトウモロコシも材料とされる。発酵させてすぐドロクとして飲まれるが、イネ・トウモロコシのものは甘くてつい飲みすぎ、胃の中でまで発酵するみたいだった。蒸留して飲むには、なんといつでもシコクビエのものが最良だったが、だいぶ煙くさいのが難点だった。ブータンでもネパールでも、どろどろのもろみに湯を注いで竹のストローを差し込んで吸うのだが、最後に残った酒粕に湯を足してすりつぶし、赤ん坊の離乳食にしていた。

イネ種子の採集には特に力を入れた。

チベット人はチベット高原やその東の冷涼乾燥な地域に住んできた人々であるが、ヒマラヤを越えた南の温暖な地帯には桃源郷と言える「シャングリラ」があるという伝承に惹かれて、また岩塩を主とした輸出品としてのネパール・インドとの交易の必要から、南下と小規模な定住を行ってきた。シッキムのチ

ベット人やシエルパ族などはその典型であるが、そのうちブータン人は最大の移住集団なのだ。彼らは東部ヒマラヤを超えて南下して、数百年ないし数千メートルの地帯、とくに小さな盆地に定住してきた。だから彼らの本質はヤク・ウシ・ヤギ・ヒツジを飼養する遊牧民であり、彼ら本来の栽培植物としては主食とあってよい「ツアンパ」（麦こがし・ハッタイ粉）として食べるオオムギがもつとも重要で、コムギがそれに次ぎ、ダツタンソバ・ソバ・カブラなどだけだった。新大陸発見後はこれらにトウガラシ、バレイシヨ、トウモロコシが重要作物として加わった。

現在ではイネはブータン人の主食の位置を占めている。おそらく世界でもつとも標高の高い土地で水田栽培が行われていると言えるだろう。二二〇〇ないし二五〇〇mの高さまで栽培されているイネの多くは、ジャポニカ種のいわゆる「赤米」品種である。この種子の表層部分にいろいろな程度に赤い色素が分布している。精白してもスジ状に赤い筋が残ることも多い。この「赤米」は、「外米」と呼ばれて戦後の援助物資として日本人に配給され、我々にはなじみ薄い味と食感のインディカ種がほとんどで、また多分古米が多かったためであろうが、日本人には大層嫌われたのである。政府も百姓も、江戸時代以来の白米崇拜によって、「赤米」を不良米として一生懸命その駆逐に走ってきたのだ。もつとも近年の民俗学ブームに際しては、各地の古い神社に神事用として赤米が保存維持されてきたことがわかり、また最近では健康食信



Takusanga 1970.01.05

これらの採集品は帰国後に最も
適当と思われる研究機関に研究材
料・遺伝資源として寄贈した。た
とえば、イネは農林省、オオム

ギは岡山大学附置農林生物研究所
(当時。現在は資源生物科学研究所)
、コムギは京都大学農学部附
属生殖質研究施設(パンコムギの
祖先種発見者として、また昭和天
皇の植物学の先生として名高い木
原均先生が文化勲章の賞金を基礎
に設立した)、シャクナゲは神奈
川県立大船植物園などであった。

その他は自分で毎年少しづつ栽
培・採種して維持した。

仰から注目されたりしている。そのまま炊い
たらまさに赤飯となるので、アズキを混ぜた
赤飯の起源との関連も指摘されたりした。
ブータン人の日常の食事にこの赤米は欠か
せない。彼らは白米などより絶対おいしいと
言うのだ。米の品種としては古いものが多く、
収量的には近代品種に劣るものの、病害虫や
低温に強いという特性があるから、ブータン
のような高地には適していることは確かであ
るし、育種素材としても重要である。

野生植物としては、シャクナゲ種子の採集
にもっとも力を入れた。ブータンの原生林の
圧倒的部分をなす照葉樹林の主体であるカシ
とならんで、またもっとも華やかであるのに
外国で紹介されてこなかったのがシャクナゲ
であろうと思ったからだ。カシ類はあま
り入手できなかつた。動物に先に取られてし
まったのだろう。

しかし驚いたことに、最重要と考えていた
イネの種子は完全な形では手元に残らなかつ
た。イネは日本にとってはムギ類や柑橘類な
どと並んでもっとも重要な作物である。従っ
て資源や防疫対象としての国家管理は厳し
く、原則として輸入禁止であり、持ち帰るに
は特別許可を必要とする。その場合でも、一
年間隔離栽培されて安全が確認された後で輸
入者に採種された種子の一部が渡される。と
ころが、私のもとに返ってきたのは、数袋の
種子と、手違いにより、採種された種子が
入り混じってしまったので、採集時の番号は
不明という驚くべきコメントであった。考
えられないミスだ！腹が立つて怒る気持さえ
失せるほどだった。ふざけるな！信じられな
かつた！

この調査旅行とブータンについて我々が得

た知識の一部については、桑原武夫編「ブー
タン横断紀行」⁹⁹に詳しい。さらに、私が滞
在中に描いたスケッチは AACK Homepage
に掲載した¹⁰⁰。

ブータンから帰って 三島にて

一九七〇年一月にブータンから帰国して妻
の実家に居候しながら、職探しに奔走してい
た。妻は結婚前から神戸大学の助手を続けて
いた。私のような遺伝学出身で学位も持たな
い人間などを雇う研究機関や会社などあるは
ずもない。少々経験のある製薬会社の営業マ
ンなら再就職は可能だったろうが、そんな気
持ちはまったくなかつた。主に探したのは、
実際の栽培や交配をやれる、大学や種苗会社
の農場や牧場の下働きだった。しかしそんな
のはどこも安く雇える中卒で十分なのだっ
た。大卒、まして京大卒などなんの役にも立
たないのだった。職探しの合間には憂き晴ら
しを兼ねて六甲山の麓をうろついている山菜、
野草を採り、義母に「お義母さん、これおひ
たしにしてください」などとやっていった。

しかし信じられないことが起こった。遺伝
学教室の先生から「木原均先生がコムギの研
究を手伝える若い者を探しているが、やれる
か？」という連絡をいただいた。なんたる幸
せ！願ってもない。先生は京大での現役時代
から木原生物学研究所(通称は生研)を設立
し、国立遺伝学研究所(遺伝研)初代所長を
退官後は、生研の三島分室と圃場でコムギ研
究を続けておられたのだ。三月に早速三島に

行き、幸いに採用していただいた。同時に遺伝研の特別研究生にもしていただいた。すぐに単身赴任するともうコムギの交配シーズンで、日中は顕微鏡観察用材料の採取、圃場の手入れ、交配作業、夜は遅くまで染色体観察。毎日一八時間以上働いたが、少しも疲れを感じなかつた。これがしたかつたんや、と毎日楽しくてしようがなかつた。少し時間が取れるようになると、遺伝研の阪本寧男先生のゼミ、図書室あさり、昼休みや日曜には箱根山麓の散策や植物採集に熱中した。お茶の時間にはみんなが集まり、木原先生のお話をうかがった。『木原天皇』と呼ばれたと聞いていたのとは大違いで、おだやかでユーモアに富んだすばらしい先生だつた。その博識と老いてなお抜群の記憶力と強い意志と好奇心にはただただ脱帽した。後に有名になつた、『地球の歴史は地層に、生命の歴史は染色体に刻まれている』という言葉は、このような時に先生が満足そうに見せてくださったものである。先生はまた箱根が大好きで、コムギのシーズンが終わると、いつも箱根の山で「コムギ祭」をして楽しんだ。とくに一面に咲き誇るヤマボウシはすばらしかつた。ある時は、芦ノ湖に船を出して私が潜水して、湖底からニヨキニヨキ生えている杉の幹を採取した。噴火で芦ノ湖ができた時に埋もれた杉の大本群だ。早速年代測定をしてもらい、先生は後に著書に書いている。

三島、箱根、芦ノ湖は私個人にとつて非常に思い出深い所となつたが、他にも忘れがたい思い出がある。後に岡山に移つてからも、

毎年数回は車に子供たちを乗せて、私の東京の実家に帰つていたが、その途中三島や箱根に寄るのが常であつた。小さかつた娘は芦ノ湖をことの他お気に入り、アシノコ、アシノコ」と繰り返し返していたが、岡山への帰り道、名神高速で琵琶湖を通り過ぎる時に妻が「これは琵琶湖よ」と教えた。しかし娘は「びわノコ、びわノコ」と言うばかりで、絶対「びわこ」と言おうとしなかつた。湖は「ノコ」であると思ひ込んだらしく、これはその後しばらく矯正できなかつた。

勉強のほうは、コムギの遺伝学を中心に植物全般に及んでいたが、私は植物の左右性に強い興味を持った。左右性というのは、例を挙げればアサガオの蔓は右にしか（人によつては、同じ向きの巻性を、左にしか、と表現する）巻かない、新葉は右前か左前に巻き込まれて出てくる、ラセン葉序が右か左に回転する、などである。しかし左右どちらになるかは偶然の産物であることが多い。木原先生は昔からこの問題に関心を抱いておられた。私はたまたまサトイモの各部位に左右性が出現し、それらの一部は規則性があるが一部は偶然に決まると見られるということを見出して、先生に報告した。先生は喜ばれ、「やってみたまえ」と独自の研究開始を許可してくださつた。この問題はなかなか難しいのだ。サトイモを遺伝学的な研究対象にするには、

実験計画の作成はもとより、実験材料の設定、それに交配自体がまず不可能なのだつた。日本のサトイモ品種のほとんどは種芋による栄養繁殖によつて増殖される。それは、遺伝学

的に不稔の三倍体（一細胞中に三組の染色体セットを持つ）が多く、稔性があるはずの二倍体であつても、元来亜熱帯産であるためか温帯の日本では開花せず、開花しても種子ができないのがふつうだつた。これでは遺伝の実験はできない。

左右性の実験は、従来はモノアラガイの巻性くらいしか例がなかつた。どうしても自然界の中の観察だけに限られて現象論を語るだけになる。立派な研究論文などする望みはまったくといってよいほど無いのだつた。しかし私はサトイモの品種集めと詳細な形態観察から始めてこの植物の形態・生理・生態を知り、そのうちなんとか交配を可能にして、純系と変異系統を作出することを目指すことにした。

一方大分以前からであつたのだが、生研の財団法人としての運営は非常に困難となり、とうとう三島分室は閉鎖の止むなきに至つてしまつた。横浜の先生のご自宅にある生研本部で細々と生き延びることになり、やがて私が生研を離れてから、横浜国立大学に名称が保存されることになつた。私は再び人生の岐路に立つた。私はアメリカに留学して学位取得に専念することにした。生まれてきた長男と妻は神戸の実家に預かつてもらうしかなかつた。

留学計画は阪本先生の口添えのおかげで、実現一歩手前まで進んだ。しかしまたも急転。少し前に生研から岡山大学農学部教授に転出していた人から、「助手のポストが回つてきたから、君に来てほしい」と言つてきたのだ。



サトイモの左右性の例・芋の葉柄基部と幼葉（共に右巻）・1971 吉野

初めは「学位取得が第一ですから」と断ったが、「それは自分がなんとかする。学位を取ってきてでも日本に職はないぞ」という言葉に負けた。それは事実だったのだ。多くのアメリカ帰りの先輩たちもそれで大変苦労していたのを聞き知っていた。木原先生は初め、猛烈に反対された。といつても、これ以上私を雇うことは不可能なのにと考えたが、とうとう許可してくださった。岡山に赴任した。三島での生活はたった二年間だったが、すばらしく充実したものだ。私にとって、前橋での三年間、京都での六年間と並ぶ人生の最大の転機の一つで、最もなつかしい日々となった。

Yalung Kang, 一九七二

遠征実現まで

ヤルン・カンには東ネパールとシッキムとの国境地帯にあるカンチェンジュンガ山群の高峰である。上田ポックポによって八五〇五mと測量され、当時世界最高の未踏峰と認定され

た、世界第五位の高峰である。ヤルン・カンはむろんAACKの遠征であったが、その隊員はすべて京大山岳部出身者であり、京大山と探検の伝統を受け継いだ山岳部にとつても最高のゴールであった。不幸にして、初登頂直後の遭難と松田（ランプ）隊員の遭難死と上田（ポックポ）隊員の奇跡的な生還という衝撃的な結果に終わったが、ヒマラヤ登山史上の一エポックであった。

AACKは戦前から、イギリス人の山と言われたエベレストを除くK2、カンチェンジュンガへの遠征計画を練っていた。それが日本山岳会のマナスル遠征と会員・今西寿男による日本人初の八〇〇〇m峰初登頂につながった。AACKはその後アンナプルナ遠征に続いて、チョゴリザ、ノシヤック、サルトリ・カンリの初登頂を経て、いよいよ単独でカンチェンジュンガ山群の八〇〇〇m未踏峰を目指すことになり、ヤルン・カンに至ったのだ。この山は従来カンチェンジュンガ西峰と呼ばれていたが、一九六二年に中尾先生がヤルン・カンという名称を聞き出してこれがわかったため、私たちは以後この名称を採用した。カンチェンジュンガはシッキム住民にとつての聖山であるので、その名前を使うよりは現地での抵抗感は少なかるうということさえ考えた対応だった。

実はAACKの日常運営機関である「木曜会」では登攀対象として、イギリス人が初登頂した主峰をはさんで隣り合う、南峰と西峰に意見が分かれていた。西峰のほうが高く山体にボリュームがあり、主峰からの独立性が

高いし、雪氷部分が多い。それに反し南峰は、傾斜のきつい岩稜や岸壁が多く登攀は難しそうだ。上部に至るルートも西峰のほうが自由度が高そうだ。私など若手の一部は登攀意欲をそそられる南峰を主張したが、大勢は断然ヤルン・カンであった。元来AACKは、未踏峰であれば、登りやすい方、高い方を探るのであった。この時も錦さんの「登らなあかん」の一言で決まり、であった。なんといってもAACKは今西錦サンが絶対であり、またその簡潔な言葉がいちいち、確たる根拠と説得力を持っていたのは確かであった。

一九六四年に初めて、アンナプルナ四峰隊員だった舟橋明賢さんを隊長として、登山許可を申請してヤルン・カンは許可されたが、直後に許可が取り消された。理由は不明だったが、聖山というのがその理由かとも考えられたが、むしろ政治的理由であったらしい。

一九六七年打開策のないままに、熱心な計画推進者であったガネッシュ隊長の樋口ジャソンさんと松田ランプを偵察隊としてヤルン氷河に派遣した。あらゆる手段に訴えたものの展望は開けず、諦めムードが広がっていった。樋口と松田だけが意地になつて執念を燃やしているように見られていたが、松田でさえ一時ブータン行に避難した時にはウジウジしてなかなか言い出せず、私が「お前、ブータンに行きたいなら行きたいで、はつきりせーや」と詰め寄ると、自分からはなかなか言えんからなあ、ともらした。やはり樋口さんに遠慮していたのだろう。結局松田は樋口さんに、ヤルン・カンの許可が下りたら必ず行く、

と約束して、我々とブータンに行った。しかし後に彼は、結婚を考えている女性がいる、と私にポチリともらした。いろいろな思いがあったのだろう。樋口さんは人前で愚痴をこぼす人ではなかったが、この時だけはさびしそうに私に言った。

「ランプまで諦めたら、残りはわし一人やなあ。」

ヤルン・カンはそれくらい絶望的な雰囲気だったのだ。

だが、一九七〇年頃から登山許可拡大という雪解け情報が伝わるようになって、つい在一九七二年八月許可が下りた。

しかし遠征隊の構成に関して大きな問題が起こっていた。「今度こそAACKの総力を挙げて取り組まねばならないが、それには従来にない大規模な募金を募らないとならない。よほど集金力のある隊長でないとしためだ」というのである。私たちはそれまでの経過から当然樋口隊長になると思っていたが、数千万円の予算となると、たしかに大変である。なにしろ酸素ボンベだけにしても、国産のはフランス製に比べて重いのには法的制限から容量が小さい。いくら高価でもフランス製を多く持つていきたい。最高所で使用するものだけに、登頂の成否にもっとも影響する要因であった。錦さんが「西堀にやらせる」と言っているともれ聞いて、私などは、「何をいまさら」と反発する気持ちは強かったが、やむを得なかった。結局、初代南極越冬隊長として日本の底力を世界に示した西堀さんが総隊長、樋口さんが登攀隊長となった。それ以外

の隊員は一三名、会員から公募して選考委員会が決定ということに決まった。

この時私は岡山大学農学部の手先に赴任して四ヶ月しか経っていなかった。妻と一歳の子供がいて、これからがんばってなんとか学位を取ってまともな研究者にならねばならない正念場だった。一年浪人、二年留年してガネットシユに行き、大学院入学を断念して会社勤めもしたので、他の人よりはるかに遅い研究者スタートであったのだ。

我がガネットシユの樋口ジャンさんは、当時すでに京都大学防災研究所助教授から新設の愛媛大学海洋学科主任教授に転出していった。実はジャンさんの専門は私の山学部とは大違いで、海洋学だった。ガネットシユのBCでも、インド洋からヒマラヤまで飛ばされてきて雪の芯となる海塩核をガラス板に集めては分析していたのだ。毎週末に枚方の自宅と単身赴任の松山を往復する度に、岡山に寄ってお酒をつきあつてくれるのが常であった。私がブータン行の直前に仲人になっていた。私がいち関係から、私もしょっちゅう妻と息子を連れて枚方のお宅にお邪魔していたし、たまの木曜会出席の帰りに泊めてもらうのは毎度だった。ガネットシユの時とはまたちがう樋口さんの人柄に触れることも多くなっていた。

許可が下りた時すぐ、樋口さんから「隊員に立候補してくれ、岡大への手続きに必要なら、なんでもやるから」と言ってきた。しかし私は最初から諦めていた。もちろん行きたかった。どうなるうとも、私の山の最高

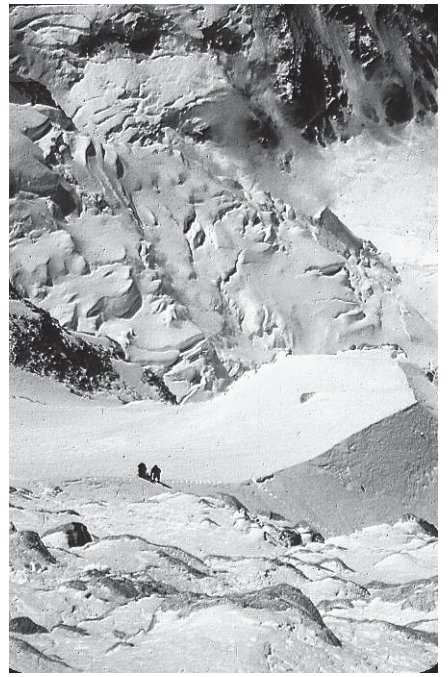
峰になるのはまちがいないのだから。だが無理だと思った。

岡大のような新制大学は、京大などと違って、当時博士の学位審査権がなかった。適当な時期に学位審査権を持つ大学（普通は教授の出身大学で、当時は国内の旧帝大や限られた大学だけだった）に、教授が子飼いの助手を一年間国内留学させて学位を取らせたら、講師や助教授に昇格できたのだ。こんな状況下でヒマラヤに行くなんて言い出した。大学を首になりにかねない、と本当に思った。しかし悔しかった。妻は言った。何回も。「でも、やってみないと、わからないじゃないの？」

私も踏み切った。ダメで元々、せいぜい凶々しい奴だと言われる程度だろう。学科の何人かの先生に説明して支持をお願いして学科会議に申請した。案の定、猛反対があった。「助手が海外出張？それも登山だ？」

前代未聞なのだった。それでも支持してくれた先生はあり、奇跡的に許可された。今から考えれば、私がブータンに行った前後からの激しい大学紛争やその社会的理解の進展などを通じて、大学の体制をなんとかしなければならぬと考える風潮が広まっていた背景に助けられたのだと思う。私はまた生き返った。妻には何回も迷惑をかけるばかりだったが、この時の彼女の背中を押してくれた一言は何者よりも強い力があつた。

隊員が決定された。松田はもちろん、ガネットシユの同僚、上田ポッポも隊員になった。



吉野での雪稜下のデポ地
ヤルン・カンとカルマ

シエルパの親分・サーダーは当時脂の乗り切っていたカルマ・シエルパに決まった。彼はガネツシュでは最年少のシエルパで、ダウラギリ巡りには私と木村を助けてくれた大変気のいい体力のある男だった。

ほとんどの隊員は関西在住で、私だけが少し離れた岡山住まいで実験講義や教授の仕事の手伝いもあり、募金活動や京都での検討会などにあまり貢献できなかった。それで、「その代わり、報告書の編集はわしがやるわ」と宣言した。しかし実際には、ヤルン・カンから帰国後の編集中に何人もの隊員が遭難死したりして、一部を私が代筆・加筆するなど苦労することになった。ついでながら、西堀総隊長の文も京大総長の序文も私が原稿を書いている、承認してもらった。総長の文については、最初原稿を梅棹先生に見てもらったが、吉野君、これは青年の文章やな、と笑われて、赤面した。書き直してやっとお許しを得たのも、懐かしい思い出。

一九七三年一月以後、隊員と荷物がネパールに向かった。私が伊丹空港から出発する日、父が東京から見送りに来てくれた。

初登頂と遭難

インド国境のビラトナガール、ダーランから、一五人の隊員、三〇人のシエルパ、五〇〇人のポーターによる大キヤラバンとそれに続くチベット人高所人夫によって、一ヶ月後、無事にヤルン氷河の側谷内の放牧地、ツエラムに荷物を集積し、ヤルン氷河を登って全員がBC(五二一〇m)に集結したのは四月二日だった。

ところで、西堀先生は総隊長に決まってしまう前にアマチュア無線の免許を取り、当時はまだ試作品段階だった太陽電池を手に入れて、ツエラムを基地として日本との交信を行い、最新の気象情報を手に入れてくれた。これが我々の登攀活動にどれほど役に立ったかわからない。おそらく世界初の試みだったにちがいない。初め、私たちは結構かさばり重たい無線セットが迷惑で、「おじいちゃんのお遊び」などと陰口をたたいていたのだった。先生は京大助教から東芝に移って真空管技術の開発などに貢献し、日本人初のデミング賞受賞者となった。京大に復帰されてから、第一回南極観測隊副隊長兼越冬隊長として、抜群のアイデアと指導力を発揮された。

伝え聞いていたところでは、この人事が決定されるについては、先生自らが隊長であった永田東大教授に直接売り込みに行ったということだった。後には製造業全般にわたる技術・品質管理コンサルタントとして多くの企業から信頼された。このような先生の行動力と幅広い人脈、実績を、私たち隊員はある程度は知っていたが、ごく表面的な程度だった。もっと先生に敬意を払うべきであったのだが、最初のうちはあまりありがたいとは思っていなかった。それは一つには、(せつかく樋口さんが長年努力してきたのに、最後の段階でトップの座を引き渡す羽目になった)という単純な憤慨が成させた感情からであつたらう。しかし実際には先生の実力はさすがにたいしたものだった。考えてみれば、太陽電池の調達などは先生としては簡単なことなだった。

また先生はツエラムで満七〇歳の誕生日を迎えられ、三日間かけてヤルン氷河を登り、それこそよるけるようにしてBCに辿り着いた。この年齢での世界最高高度到達記録であろう。しかし驚いたことにその夜は遅くまで天測をしていたし、翌朝には元気にBC周辺をうろつきまわっていたのだった。私はつい最近まで七〇歳だったが、とても真似できない。四月二日ツエラムに帰る前夜、先生はトランシーバーで我々に語りかけた。

「私は自分がBCに着けるようなら、ヤルン・カンのピークは登れる、と信じてここまでやって来ました。諸君もだから、がんばってください。これまでいっしょに過ごしてき

て、私は諸君がすばらしい若者であることを知り、誇りに思っています。どうぞみなさん、西堀がツエラムで諸君を待っていることを、忘れないでください。」

我々は改めて、先生がいかにかこのヤルン・カン遠征に打ち込んできたかに思い至り、厳粛な気持ちになった。

キャラバンの途中先生はこんなことを言われた。

「わしのあだ名は、エテさん、やったけど、ほんとはな、今西のほうが動物なんや。あいつが猿をやったのはあたりまえなのや。たとえばスキーやけど、あいつはなんも考えんでも曲がりよんのや。わしにはでけん。せやけど、なぜ曲がれるのかその理屈がわかったら、わしはすぐ曲がれるようになるのや。」

あいつは動物やけど、わしは人間やで、と言わんばかりの冗談を飛ばしながらも、それぞれの個性を鋭く指摘した先生の語り口は強く印象に残った。先に述べた桑原先生の述懐と併せると、京大の山と探検の伝統を打ち立て、AACCK創設の立役者であった三者三様の若き日の面影が眼前に浮かんでくる。

ヤルン・カンのどでかい図体はさすがに手ごわく、苦勞した。隊員やシェルパに病人が続出したことによる荷揚げの遅れ、最後の段階で時間を稼ぐためもあって、しかたなしに貴重な酸素を予想外の低高度から多用したことで、悪天候による停滞などで、C4（七四四〇m）への荷上げが進まず、登攀計画は大幅な修正を迫られた。私は富田さんの助けを借りてアタック前の登攀計画の修正にやつきにな

り、なんとかギリギリいっばいのラッシュ・アタック計画を作った。

私は頂上アタック前の身体検査でも異常はなかったらしいし、体力も絶頂と感じていたので熱心に登頂隊員を希望していたが、子持ちであることが災い（？）したらしく、松田と上田がアタック隊員となった。サーダーのカルマと共に一応は第二次アタック隊員となったが、モンソーンの到来が近いこと、隊員・シェルパの疲勞と装備荷揚げ能力の不足から第二次アタックが不可能であることはわかりきっていた。ただ一度のアタックがあるだけだった。

五月一三日、C5（七九五〇m）を建設した。サポートの我々は翌日の朝飯や紅茶作りのために氷を溶かしてテルモスに詰めたりするのに時間がかかり、サポート隊が寝たのは夜一〇時過ぎだった。一四日午前二時五〇分に起床し、前夜湯で戻してシュラフ内で抱いて寝たアルファ米でおじやを作ったり、紅茶を沸かしたりした。頼りにしていたプロパンガスの火力が意外に弱く、ガソリン・ラジウスを併用しても、ひどく時間がかかった。当初はサポート隊が途中までのラッセルもするはずだったが、アタック隊に先発してもらわざるを得なかった。

サポート隊員として、浅野潔（パンネ）も加えてカルマと共にC5を出発したが、すぐに浅野の酸素ボンベがリークして空になってしまい、三人分の荷物を一人で持って登った。浅野は前夜、痔が出てしまい心配していたのだが、意外なトラブルでなんととも言いやうが

なかった。デポ地でアタック隊に追いつき新しいボンベや紅茶を渡した。そこから右手の岸壁は六五度以上の傾斜があつて雪もついていなかった。彼らの帰路のために使えるすべのアイスハーケン、ハーケン、ザイルでルート作業をしながら下つて、C5に帰着したのは夜九時過ぎだった。カルマはぶつたおれるようにシュラフにもぐりこみ、すぐに大いびきをかき出した。私もBCに報告した時は声を出せないくらいだった。なるべく使わないで登った私たちの酸素ボンベはデポ地に置いてきた。

五月一四日夜に松田隆雄（ランプ）、上田豊（ポッポ）の兩名が初登頂に成功した。これは上田の救出後の報告でわかつたので、登頂時刻頃のアタック隊からの交信は雑音や音声の断絶で下では聞き取れず、ついに交信不能になっていた。

しかし松田と上田は頂上からの下山時に突風でビバーク用のツエルト・ザックを吹き飛ばされ、さらに酸素ボンベのデポ地（八一四〇m）にたどりつけなかった。後で上田の報告からわかってきたが、酸素不足が原因で、おそらくそれに疲勞も加わつて視力を失い、登りの時のトレースから外れてしまったのだつた。

私は翌朝、デポ地より上方の登頂時のトレースより左側の小雪面の右に二人の姿を認めた。松田は座り込んで、上田が付近を動いていた。ちよつと目を離れた後、松田は見えなくなつていて、上田は左手の雪面をウロウロしていた。快晴で、彼らとは手が届きそうな距離だった。彼らの登りのトレースは私か

らはつきり見えているのに上田には見えていないようだった。必死に呼びかけたが、聞こえないらしくなんの反応もなかった。私は彼らが遭難したものと判断して、BCの樋口登攀隊長に「すぐ救援に上がりたい」と伝えましたが、「酸素もなしに疲れているお前達が行ったら、二重遭難になる。下のキャンプから至急救援隊を上げるから待て」と言われ、一刻を争うのだ、下の連中も荷揚げでバテいるはずだ、と悔しがつて粘ったが、カルマも痔の浅野も、それに私自身も使い物にならないのはわかっていた。どうにもできなかった。

結局、上田は暗くなつてから、第一次救援隊の甲斐邦男、森本陸世（グロン）と合流できて、一六日未明にC5に収容された。上田は三日間も八二〇〇m以上の高所にいたことになる。救援隊は松田の折れたピッケルシャフトと上田が落としたザックを回収していたが、松田は発見できなかった。続いて第二次救援に富田幸次郎、高木真一（ゼンカ）が上がつたが、松田の手がかりは得られず、酸素も隊員の余力も尽きて、捜索は断念せざるを得なかった。上田のザックにあったカメラには、頂上にAACKの旗を結んだピッケルを打ち込んだ松田の顔が写っていた。せめてもの幸いであった。

上田はBCで斎藤敦生ドクター（ワイさん）に凍傷の応急処置を受けた。西堀先生が無線で要請した、ネパール軍差し回しのヘリコプターでカトマンズに搬送された。六月一日に帰国して手術を受け、両足指すべてと右手四本の指の一部を失った。その後、南極・ヒマ

ラヤでの何回もの氷河調査に活躍するまでに回復した。

ヤルン氷河の側谷の一角にケルンを積み、最後に残ったたつた一本の酸素ボンベとウイスキーを供えて、松田への別れとした。私は悲しいというより、ただただくやしかった。

八月一日には松田の葬儀が京都でとりおこなわれた。AACK内部では、遭難に対する厳しい調査と検討がなされた。悪天候続きと故障者続出による日数と酸素ボンベの予想以上の消耗が痛かったし、シエルパの意外な消耗の激しさ、アタック隊員との無線機の不通は我々に直接的なダメージを与えた。上田のザックから回収された無線機は、帰国後にメーカーで検査してもらい、ハンダづけが一カ所破損していたことがわかった。登頂時刻頃にすでに通じなくなっていたことから見て、落下による衝撃によるより前に不良となっていたか、破損していた可能性が高いと思われたが、詳細は不明である。

我々サポート隊が張ったフィックス・ザイルが救援隊の行動を大幅に早め、上田を安全に助けおろすのに役に立ったのだろうと満足するしかなかった。何よりも予想された以上に好天が続いたのは大変幸運だった。

帰国後の遭難検討会の前に全隊員が集まり、改めて登攀行動全般を振り返った。はつきり言って、隊員たちの雰囲気は悪かった。遭難を起こしたという、いわば罪悪感に駆られている負け犬のようで、私はいらいらした。検討会での議論では遠征隊のタクティクスでの失敗を指摘する意見が強かった。それらに対

しての反論は事前に十分に考えていたが、いざとなると隊員側からはなかなか言いにくいもので、言われっぱなしのようになった。私はいくやくして、後続の支援が明らかに不足する中でも敢えてラッシュ・アタックに切り替えることとなった経過と計画の詳細について、言うべきことや説明すべきことはなるべく主張したが、多くの隊員は黙っていた。歯がゆい限りだった。

後になって錦さんと飲む機会があった時に、「吉野、本当のところは、お前の言うことが正しいのや」、「せやけど、はじめはつけなあかんのや」と言ってくれた。私は納得できた。

なお、西堀先生が無線でいち早くメイン・スポンサーの朝日新聞社に、初登頂と松田遭難の知らせを送信したが、これが「初登頂」、その直後の「遭難」に分けたセンセーショナルな記事となった。ネパール政府に対し、西堀先生が謝罪するという一幕もおまけに書いた。遠征に関するニュースの第一報はネパール政府宛にする」という事前の約束に反してしまったのだった。国王と西堀先生の長年の信頼関係からなんとか納まった。

私は報告書の編集を始めたが、遠征の翌年五月には富田・浅野が美濃の山で車の転落により死亡、さらにはカラコルムのK12峰初登頂直後、高木たち登頂隊員が頂上から下山中に滑落、死亡という事態が起こった。報告書の原稿も完全ではない時期であり、大変苦労したがなんとか出版し²⁾、追って学術報告書²⁾も編集・出版した。そしてその後、私は一切

の登山をやめた。一九六〇年に山岳部に入ってから、現役六年間、ガネッシュ行を含めて毎年平均一八六日間も山にいた。これは京大山岳部の記録だろうと自負している。

ヤルン・カンまでの一三年間、かなり激しい登山を続けてきていた。すでに一児の父であり、大学での研究業績も挙げねばならない時期であった。好き勝手に登山を楽しむゆとりもなく、何よりも（これ以上続けたらおれも死ぬな）と漠然と思うようになっていた。

スケッチ断想

先日ブータンのスケッチ、ヤルン・カ



Koktang (6,398m) と West Ratong 氷河・Ramser 氷原 (4,470m) から 1973.03.25

ンのスケッチ²³、剣沢大滝の写真をACK Homepageに掲載させてもらったが、それらの一部も整理して、本稿に挿入した。前二者の一部は「ブータン横断紀行」と上田豊の「残照のヤルン・カン」²⁴にもカットとして採用されたものである。それらのスケッチのほとんどは水性の同じ太さのサインペンを用いて描いた。だから描き直すことはできなかった。しかしある程度線の太さや濃淡などを表すことはできる。対象をじつと見て、気持ちのおもむくままにペンを走らせた。座り込んでスケッチの手を動かしていると、岩登りをしてる時に、手を伸ばしてつかんだホルルドの感触を確かめて一気に体重を移すような、一種のスリルとリズムからくる爽快さを感じたものだった。どちらも私の性にあっているのかも知れない。一〇分くらいじつくりと眺めて構図も決めてから、一枚をだいたい一五分くらいで描いた。

なおヤルン・カンのスケッチのほとんどは、ヤルン谷の荷物集積基地であるTseram (二八〇〇m)、Ramser (四四七〇m)、ヤルン氷河内のBC (五二一〇m) 周辺、CH (六四七〇m) で描かれた。とくに登攀ルートを探るために双眼鏡片手に三日かけて上部のスケッチをした時は、時間を忘れてヤルン・カンの氷と岩の壁を見つめて鉛筆とペンを少しずつ動かしていた。キャラバン中は往路でわずかに五枚、帰路のGhansaでの二枚のみである。キャラバンは往路では一五人の隊員、三〇人のシェルパ、五〇〇人以上のポーター、現地購入食料を除いたすべてで三〇トンを超

す荷物、という空前の大部隊であった。隊列は前後数キロの長さにわたった。隊員は個人装備のみの軽装でごく短時間で一日の行程を済ませてしまえるので、時間のゆとりはたっぷりであった。そのわりにスケッチが少なかったのは、私がインド国境のビラトナガルからヤルンの谷に入るまで、専門とするサトイモ科の野生・栽培植物、麦、蕎麦、雑穀などの種子の調査・採集・記録に集中していたからである。帰路のキャラバンでもそれを続けたが、遭難後でもあり荷物の少ない早足の旅で、スケッチに割く時間もなく、それ以上になれなかったからである。

なお、キャラバン中に採集したサトイモ科植物のうち、数系統は大変貴重なものであった。とくにその一系統は後に、形態的特徴と染色体の分裂時の特異性、雌雄花双方の不稔性、葉緑体DNAのRFLP分析から、サトイモ属とクワズイモ属との間の自然属間雑種である可能性が高いことがわかり、のちに私の学位論文の一つの柱となった。また他の二系統は、世界で初めて報告された野生型の三倍体であった。

ブータンの時と同様に、ムギ類その他の栽培植物の種子も大量に採集して、帰国後各研究機関に寄贈した。

承らくしまいこんでいたスケッチや写真を整理していると、故松田ランブの写真が出てきた。写真はヤルン・カンの募金活動に行くために、私が彼の神戸の実家に泊めてもらった翌朝、撮ったものと思われた。私はスケッチを久しぶりに見直して、私たちがいかにす

ばらしいヤルンの谷に青春の貴重な一時を過ごしていたか、今更ながら感慨にふけった。私のつたない技ではとうてい表現不可能な、莊嚴で美しい世界だった。

思えば、ランプだけが一人で二八年間もヤルン・カンの高みからこの氷雪の世界を見つめてきたのだ。さびしかっただろうか。今となつては、以て瞑すべしである。ここに改めて彼の冥福を祈る。

引用文献・参考資料

(19) 桑原武夫 編、松尾稔・吉野熙道・栗田靖之…「ブータン横断紀行」、講談社、東京、

図書紹介

「梅棹忠夫——「知の探検家」の思想と生涯」

山本紀夫著 中公新書

二〇一二年一月発行 八二〇円十税

梅棹忠夫氏が亡くなってから、氏に関する本は何冊も刊行されたが、そのどれもが、著者が梅棹氏の生前に面会して聞き出されたものや、講演会や対談をまとめたもの、あるいは膨大な氏の著作物を分析して梅棹氏の人となりを書き上げられたものである。今ここに紹介する一本は、梅棹忠夫氏が名実ともに「最後の弟子」と認められた山本紀夫が四〇年にわたる薫陶のもとに著した梅棹忠夫の実像であ

1978。

(20) 吉野熙道：「Bhutan Sketch 1969-1970」、AACK Homepage

(21) 京都大学学士山岳会編：「ヤルン・カン」、朝日新聞社、東京、1975。

(22) 吉野熙道：「東ネパールにおける野生種および栽培種サトイモについて」（京都大学学士山岳会編、ヤルン・カン学術報告書）、土倉印刷、京都、1976。

(23) 吉野熙道：「Yalung Kang Sketch 1973」、AACK Homepage

(24) 上田豊：「残照のヤルン・カン」、中央公論社、東京、1979。

る。著者は一九六四年京大農学部入学と同時に探検部に入部。当時探検部顧問であった梅棹氏が自宅で開く「梅棹サロン」に参加して子弟の絆が生まれる。その後著者はおもにア ندスを研究のフィールドの場として活躍。梅棹氏の設立した国立民族学博物館の教官となり身近に梅棹氏を知る。

本書は第一章「昆虫少年から探検家へ」、第二章「モンゴルの草原にて」、第三章「ふたたびフィールドへ」、第四章「東南アジアからアフリカへ」、第五章「アジテーター」と梅棹氏の生涯を経年順にまとめられている。この章立ては常套なもので、著者が梅棹氏を知るまでの前半の記は氏の著作集や「行為と妄想——わたしの履歴書」からの引用が多いが、その事項のすべてを、後年直接梅棹氏

に聞きただしている真正の事実である。後半、著者が梅棹氏の膝下にあつてからの「知のアジテーター」ぶりの記述は痛快である。情報産業や女性の社会進出、など文明論の先取りの聡明さに驚かされる。また「お布施の原理」や「ご先祖様になるう」、「立つ本をつくれ」など氏の発したかずかずの言語録も蕩々深いものがある。

梅棹氏は探検行を経るにつれ、動物学者から生態学者さらに民族学者へ、そして民族博物館の創設によって未知の世界の開拓者である「知のアジテーター」として足跡を残してゆくが、その原点はあくまで「山」であり、「わたしは終生登山家」であると常に著者山本に語っている。著者も自身の探検、調査行の過程で、生物学者から民族学者に転向しており、博物館の館員のなかでも、梅棹氏と著者は同じくAACKの会員であったことから、晩年には子弟のあいだよりも、山仲間としてより密接な交流がありそこで本音を吐露されたのであろう。本書をもつて実像とする所以である。

(前田 司記)

発行日 二〇一二年二月末日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松林公蔵

発行所 〒606-0801

京都市左京区吉田本町(総合研究・号館四階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所